

## 目次

### 言語の復権のために 6

〈言語〉と〈言語学〉の消長——個人史を交えて 6 / 丸山圭三郎、ソシユールとの出会い 12 / デンマーク構造主義の衝撃 13 / 愚者の楽園で出会ったザメンホフ 15 / 本書の構成と内容 16

## I 世界は言葉のなかに

### 世界は言葉のなかに——言語とその主体 22

言語学と言語哲学 23 / 言語が違えば世界も違う 25 / 人間は「意味という病びまい」を病やんでいる 27 / 「主体」が「言語」を創り出す 29 / ソシユール言語学の記号論的視点 33 / イエルムスレウ——「ソシユールの唯一かつ真の後継者」 35 / 「主体」は言語のなかにある 36 / 『格のカテゴリー』を読む 39 / 言語とは主観的なものである 40 / 自然言語のロジックは無意識をふくむ 43 / 主体性は言語のなかに浸透している 45 / 構造主義は「文化のデモクラシー」をもたらす 48 / 人間は恋する動物である 51 / マルチリンガルへの誘惑 52

## II 丸山圭三郎からソシユールへ

### 文学と饒舌——丸山圭三郎の死をめぐる 60

文学への回帰 60 / ソシユールの沈黙、丸山圭三郎の饒舌 64

ラング、ランガージュ、エクリチュール——丸山圭三郎と〈言葉〉という多面体 69

言語学、言語哲学、文学——ソシユールからソシユールへの道のり 74

〈言語学〉か、〈言語哲学〉か 74 / ソシユールの恣意性とは何だったのか 79 / 「相対的恣意性」は小さな問題か 80 / 〈言語学〉の誕生 84 / 記号の交通としての「相対的恣意性」 87 / 〈文学〉のほうへ 92

ソシユール『一般言語学講義』——〈言語学〉とその外部 97

言語学の成立 97 / 〈言語学的なるもの〉から〈象徴的なるもの〉へ 98

言語のなかへ——丸山言語哲学を導きとして 102

丸山圭三郎との出会い 102 / 丸山言語哲学とは 105 / 丸山理論への異和感 107 / 言語が〈ある〉ということ 115 / 言語ゲームのリアリティ 118 / 言語と〈愛〉 122 / 言語の普遍性 130 / 丸山言語哲学への希望 133

### III ソシユールからイエルクムスレウへ

言語学と文学の出会い、あるいは記号論の誕生 138

ソシユール、あるいは言語の自律性 138 / 現代文学、あるいは言語の露呈 139 / 記号論、あるいは広義の言語学 140 / イェルクムスレウ、あるいは偉大なる逆説 140

〈聴く立場〉の言語学——ロマーン・ヤーコブソン 142

モスクワから、プラハ、コペンハーゲン、そしてニューヨークへ 142 / 音から意味へ 143 / 聴く主体による意味の了解 144

形式としての言語——ソシユールからイエルクムスレウへ 147

構造主義と内在主義 147 / 関係のネットワークとしての形式 148 / イェルクムスレウによる構造主義と内在主義の完成 150 / 言語学から記号学へ 152

#### IV イェルムスレウ、極北の言語学

イェルムスレウ言語学のために 156

多言語の科学としての言語学 156 / イェルムスレウ言語学の歩み 157 / イェルムスレウ言語学の視

点と成果 158 / イェルムスレウを盟友、ウルダルから分かつもの 160

言語のなかの主体 163

「語る主体」の行方 163 / 格は空間概念を表わす 164 / 格システムの第三次元（主観性—客観性） 164

／ヒュルキリ語の格システム 166

格とは何か 171

格という文法カテゴリー 171 / 形態格、意味格、そして形式格 172 / ラングではなく、システム 174

言語と言語の差異はどこにあるのか 178

「五言語による「わたしは知らない」 178 / 内容／表現、連続体／形式／実質 181

グロセマティック、《全体言語学》として 186

虚構としての連続体 186 / 言語学から記号論へ 188 / さらに《全体言語学》へ 190 / 感動的な言語

学書 191

言語類型論序説——言語の多様性、そしてその彼方へ 194

言語研究の歴史——多様性の還元として 194 / 構造主義——言語のデモクラシーとして 196 / 言語

類型論——多様性を包含した普遍性として 197

デカルトからイェルムスレウへ——言語への信頼感の回復 203

デカルト、あるいは言語に対する不信感 203 / 普遍主義から相對主義へ 205 / イェルムスレウ、あ

るいは言語への信頼 206

V 愛と差別の言語学に向けて

固有名詞への愛を生きる——恋愛の記号論

214

〔意味を求める動物〕から〔恋する動物〕へ 214／ほくは、なぜこの人を愛するのか 215／形容詞から

固有名詞へ 215／同一者の論理／愛の論理 217／これから〔恋愛〕を研究しようとする人たちへ 219

／ほくのいちおし恋愛小説 220

愛と差異に生きるわたし——区別・差別・対立・差異をめぐって 222

関係性と社交性——夏目漱石から 222／差異と対立——ソシユール、構造主義から 225／区別、差別、

対立——アドラーから 228／差異、固有名詞、交通——誘惑論から 239／愛と差異に生きるわたし 243

愛の言語思想家、ザメンホフ——言語差別を超えて 249

大言語の興亡と人工言語 249／国際語から国民語へ 253／情報量から見た大言語と小言語 255／あ

えて英語再評価へ 257／エスペラントからザメンホフへ 262／言語差別とは何か 263／言語共同体

としての民族 266／媒介語による多言語状況の止揚 268／言語平和に向けて 271／国際語エスペラ

ントと国際宗教ホマラニスモの創造 273／言語差別を超えて 280／愛の言語思想家、ザメンホフ 285

【Column】

ソシユール 58 68 73 101／バンヴェニスト 96／メルロ＝ポンティ 136／ラカン 146／

イエラムスレウ 170／メイエ 202／マルティネ 248／ロラン・バルト 288

失なわれた時の果てに 292

## 言語の復権のために

この本は、ほく自身が〈原点〉に立ち帰り、再確認し、それらを〈拠点〉として新たな探究に向かってゆくために編まれた。

### 〈言語〉と〈言語学〉の消長——個人史を交えて

二〇〇九年一二月に終刊を迎えた月刊『言語』の歴史は、ほくたちの世代にとつての〈言語〉と〈言語学〉の歴史を映し出しているように思われる。月刊『言語』編集部は、本誌終刊後に刊行した三巻からなるアンソロジー各巻の巻頭で、月刊『言語』の歴史を回顧している。

月刊『言語』は、ことばの総合雑誌として一九七二年四月に創刊された。そのちょうど一年前に提出された企画書には「言語についての問題意識が、言語学の専門分野よりもむしろ他分野の方面から起こり、相互の意見交換が強く望まれている。(中略)ここに、言語学及びその関連分野そして一般読書人を総合的に結びつける雑誌を刊行することは急務である」とある。確かに、当時は「言語ブーム」だった。人類学などの他分野の研究者たちが言語学の手法やその成果に大きな期待を寄せていた時機でもあった。

その熱気を反映してか、刊行当初は実に熱い議論が誌上で交わされている。(中略)本誌の刊行により、堰を切ったように熱い議論が噴出した感があり、それを見ていただけでも壮観だ。

〔大修館書店月刊『言語』編集部編『言語』セレクション 第1巻〕大修館書店、二〇一二年五月、iii頁

ぼくが大学に入学したのは、月刊『言語』の創刊に遅れること五年、一九七七年のことだった。東京外国語大学というまさにさまざまな言語——諸言語（レ・ラング）——を専門とする大学に身を置いたせいかわ、高校時代には耳にしたこともなかった〈言語〉や〈言語学〉をめぐる知がぼくに押し寄せてきた。

もっとも一年目は、自分が専攻として選択したフランス語という個別言語（ラング）のプレゼンスが圧倒的に大きかった。ぼくの眼や耳に〈言語〉や〈言語学〉をめぐる知が確かな実感を伴って入ってきたのは、二年生になってからだだったと思う。ぼくが所属するフランス語学科には文芸評論家としても活躍する篠田浩一郎がいて、初級文法を終えたばかりのぼくたちに、ソシユール、レヴィストロース、バルト、フーコーなどの難解な原文をフランス語で読ませた。篠田浩一郎の『形象と文明——書くことの歴史』（白水社）が刊行されたのが、ちょうど一九七七年八月だった（新装版が、一九九二年四月に出ている）。この本を読んで、ぼくは、〈言語〉という問題に、ソシユールが創始した現代言語学が構造主義を生み出し、文化人類学、精神分析学、文芸評論、哲学、社会学などに多大な影響を及ぼし、なおかつ言語学の発展の先には記号学（記号論）という新しい人間科学が展望されていることに眼を見開かされた。ぼくにとつて、思想と学問の世界に足を踏み入れるきっかけを作ってくれた書物は、間違いなくこの篠田の『形象と文明』であった。

外語大の各○○語学科の外部には、一般言語学の千野栄一、言語人類学の西江雅之という二人のカリスマがいて、全学の言語学徒たちに影響を与えていた。この流れとは異質であるが、詩人の安藤次男が文学を教えており、異彩を放っていた。しかし、ぼくは、彼らの影響下に入ることをせず、むしろフランス語を通じて文学、言語学、記号論を学ぶという方向を選びとっていった。

月刊『言語』というならば、「ソシユール——現代言語学の原点」の特集号が出たのは一九七八年三月、ぼくが一年生の終わり頃だから、実にタイムリーだった。執筆陣には、丸山圭三郎、風間喜代三、千野栄一、そ

して小林英夫など、錚々たる顔ぶれが並んでいる。ちなみに、月刊『言語』が最初に特集した人物は、意外なことに「ウイトゲンシュタイン——言語と哲学」が一九七二年一月ともっとも早い。言うまでもなく、ウイトゲンシュタインは言語学者ではなく、言語哲学者である。次いで、「R・ヤーコブソン——現代言語学の巨匠」が一九七六年二月で、ソシユールに二年先行している。続いて、「チョムスキーの全体像」一九七七年二月、「チョムスキー理論の展開」同年三月と、二号続けてチョムスキー特集が続いている。そして、ソシユール特集の一年後に、「サピアの言語論」一九七九年二月が来る。ちなみに、『現代思想』（青土社）が「ソシユール」を特集するのは、月刊『言語』に遅れること二年、一九八〇年一〇月のことであった。さまざまな翻訳論文などともに、柄谷行人と丸山圭三郎の対談が掲載されている。当時の日本の言語学界では、ソシユールは「現代言語学の原点」という位置づけであり、現代言語学にとつてのアクチュアリティではヤーコブソンやチョムスキーなどに劣る、というのが共通理解であったようだ。

いずれにせよ、高校時代までは文学青年であったばかりの学生時代は、〈言語〉、〈言語学〉、〈ソシユール〉、〈構造主義〉、〈記号論〉などに彩られることになったわけである。

一九八〇年からの一年間のパリ留学——その間にもっとも熱心に聴講したのは、ジュリア・クリステヴァの「記号学入門」講義だった——を終えてから、ほくが篠田浩一郎に提出した卒論は、一部の読者は驚くかもしれないが、ソシユールを扱ったものではない。サルトルの長篇小説『嘔吐』を分析したものだ。クリステヴァの記号分析（セマナリーズ）の理論と方法によって、サルトルの『嘔吐』を読解したのである。『エクリチュールの誕生——サルトル『嘔吐』の記号分析的読解』——フランス語タイプ原稿で、A4判三三〇ページほど書いた。それを読んでくれた篠田浩一郎は、「これは、本になりますね」と一言言った。しかし、フランス語が読める編集者には出会えず、日の目を見ていない。日本語で書いていたら、ほくは、その後サルトルの専門家になっていたかもしれない。

月刊『言語』の歴史に戻ろう。

やがて新言語学が言語学界に大きなうねりとなって押し寄せてくる。この辺りから、どちらかといえば理論的な側面が前面に押し出されてくる。実際、新言語学にもいくつもの流派があり、どちらの理論がより多くの、そしてエレガントな分析ができるかで鎬を削ることになる。そして日本認知学会が発足する。一九八〇年代になると、認知科学の波がそれに覆い被さってくる。ここまでくると、言語はもはや言語学だけのものではなく、コンピュータや脳科学など、多くの研究分野にとっても大切な研究テーマとなった。いま、言語というリングの上で様々な分野の研究者が集い、まさに「異種格闘技」が始まるようとしている時機に、月刊『言語』は休刊となった。

(同、iii—iv頁)

ほくのように、思想と文学の側から言語学を見ていた者にとつては、これは、言語学がさまざまな人文・社会科学を牽引してゆく「パイロット科学」としての使命を放棄して、言語学の内部に閉じこもり始めた時期に相当する。その頃から、ほくは、言語学の最新動向に対する関心を失い始めていたように思われる。さらに、ほくが一九九九年の〈精神的危機〉以降、言語学からも記号論からも遠ざかっていた時期に進行していた、認知科学などに介入されるようになった近年の言語学は、そもそも、いかなる人文・社会科学よりも早く自身の認識対象——ソシユールの用語でいえば、ラング——を確立したと考えられ、多くの隣接科学にとつてモデルとして機能したにもかかわらず、いつのまにか、他分野から浸蝕を受けるようになり、言語(ラング)という大切な対象を奪われ、存立基盤の危機の局面に追いやられているかのように見うけられる。認知科学の「植民地」であるかのような認知言語学だけでなく、言語起源論や言語進化論の近年の盛り上がりを見ると、それを



牽引しているのはもはや言語学者（だけ）ではないのである。（言語）は、言語学だけの特権的な認識対象ではなくなったのだ。「ことばの総合雑誌」を標榜しつつも、実質的には言語学を軸にしてきた月刊『言語』が終刊を余儀なくされたのは、単なる偶然ではなかったと言わなければなるまい。

ただし、月刊『言語』編集部は言及していないが、一九八〇年には日本記号学会が創設され、創設当初は数多くの分野の研究者や学徒の関心を集めて活発な議論が行なわれ、そのシンポジウムが『現代思想』誌上を飾ったりしていた。ひよっとすると、この時期に月刊『言語』と『現代思想』の読者層が分離していったのかもしれない。

東京の大型書店には「言語学」の棚が設けられており、ほくも思いついたときに網羅的に眺めることがあるが、それぞれの著者が自分の専門に閉じこもって研究にいそしんでいるようだという印象しか受けられない。言語学を拠点にして広く思想や人文・社会諸科学に打って出ようという気概を感じさせる言語学者は、田中克彦くらいしか見あたらない。その田中も、もう八五歳である。田中克彦に続く、野心にあふれた言語学者はいないのだろうか。

遅ればせながら、ぼくはごく最近、ぼくより七歳年下の小山亘という人がいることを発見した（ぼくは、〈精神的危機〉以降のこの二〇年近くというもの、言語学・記号論から遠ざかっていたからだ）。彼の著書を手にとると、野心や野望がメラメラと伝わってくる。ぼくは、率直にいつてまだ小山の言説を咀嚼できていないのだが、あえて誤解を恐れずに言うならば、小山亘は、主としてデンマークの言語学者、ヤコブ・L・メイ——デンマーク語の正しい発音は、「メイ」ではなく「マイ」だが——とアメリカの言語人類学者、マイケル・シルヴァステインに依拠しつつ、ポーアズ以降の言語人類学の伝統と、パースからヤーコブソンに継承された記号論の系譜とを融合させた「社会記号論系言語人類学」を構想して、言語、社会、文化、歴史を解明する体系的・包括的・全体的科学の構築を目指しているという（小山亘『記号の系譜——社会記号論系言語人類学の射程』三元社、

二〇〇八年一月)。小山は、パース系の記号論(セミオティクス)の系譜に立つために、ソシユール系の記号学(セミオロジー)に対しては批判的であるようだが、ヤーコブソン自身が言語学ではソシユールの系譜に連なり、記号論ではパースの系譜に連なると明言していたことを想起すれば(ロマーン・ヤーコブソン『詩学から言語学へ——妻ポモルスカとの対話』、原著：1988年、伊藤晃訳、国文社、一九八三年四月)、ほくたちと小山との対話は閉ざされているわけではないだろう。いずれにせよ、日本のアカデミズムにあって、小山亘のような人は稀少なる例外者である。

ところで、自分の書いたものを眺めていたら、何といまから二九年も前にも同じようなことを書いていたのを発見して、愕然とした。ほくは、ジャン・ジュゼフ・グーというフランスの哲学者の業績を解説する項目の最後に、次のように指摘していたのである。

だが、いずれにしても、さまざまな抑圧的システムからなる象徴秩序の生成プロセスを(一般等価物)の創出という同形的なロジックをもちいて形式化するというグーの問題設定が、一九六八—一九六九年という早い時期(彼が二五、六歳のとき!)にすでに提出されていたというのは、特筆に値することである。そして、言語研究がグローバルな理論化にたいする勇気を喪失してある種のニヒリズムにおちいり、個別的現象の分析だけで事足れりとする傾向のつよい今日にあって、言語を貨幣とのアナロジーにおいてとらえるおすことにより、言語にかんする考察をより広いコンテクスト、すなわち現代の諸科学が共有する思想的課題に結びつけるというグーの冒険的な試みは、きわめて貴重な意味をもつといわなければならない。

(立川健二／山田広昭『現代言語論——ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン』新曜社、

一九九〇年六月、七三頁)

「言語ブーム」の余韻がまだ残っていた一九九〇年でさえ、こうした傾向が目立ってきていたのである。ましてや、二〇一九年の今日、田中克彦や小山亘のような存在は例外として、言語研究者たちが、より一層、大挙して「グローバルな理論化にたいする勇気を喪失してある種のニヒリズムにおちいり、個別的現象の分析だけで事足りりとする傾向」に閉じこもっていることを誰が否定できるだろうか。そして、いまこそ必要とされるのは、グーのように、「言語にかんする考察をより広いコンテクスト、すなわち現代の諸科学が共有する思想的課題に結びつける（中略）冒険的な試み」にほかならないのではないだろうか。それは、必ずしも学際的であることを意味するわけではない。本書で見てゆくソシユールやイェルムスレウのように、あくまでも言語学に徹して、己れの理論的原理を確立することを通じて異分野の人びとを振り向かせるという道も存在するはずなのである。

## 丸山圭三郎、ソシユールとの出会い

さて、言語学が内向化していた時期のほくは、時代に逆行するように、言語学の〈原点〉にさかのぼることを決意していた。時代に逆行するように、とは書いたが、丸山圭三郎の長年のソシユール研究の成果が『ソシユールの思想』（岩波書店）としてまとめられ刊行されたのが、一九八一年七月であり、ソシユールが言語学という一科学を超えて一人の思想家として論じられる地平を拓いたのだから、ほくは、言語学界の趨勢には逆行していたものの、現代思想界の波には乗っていたのかもしれない。

東京大学の仏文の大学院に入ったほくは、当初はサルトル研究を続けるつもりだった。しかし、文学部に非常勤講師としてやって来ていた丸山圭三郎の講義に三年間出席し、丸山を師と仰ぎ、また弟子として認められるようになるにつれ、ロラン・バルトやクリステヴァに代表される記号論を本当に理解するには、ソシユールまでさかのぼって研究しなければなるまい、という結論にたどり着いた。それは、ソシユール研究一筋でコツ

コツとやつてきた丸山とは、いささか異なる動機で始めたソシユール研究であった。

そう、ぼくが初めて活字にしたのは、「カオスと（しての）言語——丸山圭三郎への手紙」という丸山圭三郎批判の論考で、日本記号学会の『記号学研究』（編集長は丸山！）に発表したものだった（立川健二『誘惑論——言語と（しての）主体』、新曜社、一九九一年九月所収）。だから、ぼくにとつての第一の〈原点〉が丸山圭三郎であることは、否定しようのない事実である。

しかし、実際に『一般言語学講義』の原資料（エングラー版）を自分で読み解いてゆくにつれ、ぼくは、丸山圭三郎によるソシユール読解に対して異和感を募らせていった。したがって、修士論文をもとに世に問うた処女作『《力》の思想家ソシユール』（書肆風の薔薇（＝水声社）、一九八六年一二月）は、丸山＝ソシユール批判を通じての新しいソシユール像の提出というポレミックな形をとらざるをえなかった。それは、ソシユールとの格闘の成果であるだけでなく、丸山圭三郎との格闘の成果でもあった。いずれにせよ、丸山圭三郎——著書も、人間も——との出会いがなければ、ぼくがソシユール研究を志すことがなかったことは確実だから、本書では丸山圭三郎を第一の〈原点〉として、ソシユールを第二の〈原点〉として措定するのである。

### デンマーク構造主義の衝撃

さて、ソシユール研究をさらに前に進めるために二回目のパリ留学に赴いたぼくは、クロデイーヌ・ノルマンが率いるパリ第X大学言語学史研究グループに参加し、初めて自分の探究を何の気兼ねもなく展開できる環境に出会うことができた。日本の大学では、「おまえのやっていることは、文学なのか、語学なのか？」という二律背反をつねに突きつけられ、「語学」という居心地の悪い領域に身を置くことを余儀なくされていたからである。言語学史、より広義には言語思想史は、対象は言語学や言語思想であるが、基本的な方法はテクストの読解であるから、文学研究や思想研究にはるかに近いのである。

一九八〇年代後半、言語学や記号論の分野では、構造言語学のコペンハーゲン学派に括られるイエルムスレウとブレンダルの再評価が起こり、ほくに衝撃を与えた。イエルムスレウ・ルネサンス、ブレンダル・ルネサンスが起こったのは、本国のデンマークのほか、フランス、ベルギー、イタリア、スペインなどのヨーロッパ諸国だった。この動向のなかで（英国、ドイツなどのゲルマン系諸国ではなく）ラテン系の言語（ロマンス諸語）を使う国々が中心となったのは、ブレンダルもイエルムスレウも主としてフランス語を執筆言語として用いたからかもしれない。

たまたま、ノルマンとともに多くの指導教授であった故・ミシエル・アリヴェがイエルムスレウを高く評価するグレマス派記号論（パリ学派）に名を連ねており、フランソワ・ラストイエとクロード・ジルバーペールというフランスを代表するイエルムスレヴィアンを紹介してくれたこともありがたかった。

一九八八年には、初めてデンマークに旅して、デンマークを代表するイエルムスレウ研究家であるミカエル・ラスムッセンと情報交換し、当時、イエルムスレウの未亡人であるヴィベケ・イエルムスレウ夫人がコペンハーゲン郊外の自宅で管理する「イエルムスレウ文書」を三日間にわたって調査する機会に恵まれた（一九九二年のイエルムスレウ夫人の逝去後は、「イエルムスレウ文書」はコペンハーゲンの王立図書館に所蔵されている）。多くの研究人生において、これほど光栄で、印象に深く残っている出来事はほかに存在しない。

したがって、ほくにとつての**第三の、そして最大の〈原点〉**は、**デンマーク構造主義**、なかでもイエルムスレウを措いてほかにない。クロディーヌ・ノルマンには、「あなたはソシユリアンとしてフランスにやっ来てたのに、イエルムスレヴィアンとしてフランスを去るのね」と言われた。そう、ほくは、以前、サルトル研究からソシユール研究へと「転向」したように、今度はソシユール研究からイエルムスレウ研究へと「転向」したのである。ブレンダルについては本書ではほとんど扱えなかったが、『現代言語論』と『誘惑論』で取り上げているので、興味のある方はそちらを参照していただきたい。

## 愚者の楽園で出会ったザメンホフ

ほくが専任教員として勤務した三番目の大学——正確には、学部——は、企業出身者の会社人間（＝佐高信のいう「社畜」）が教員の過半数を占め、学部長が「社長」として権力をふるい、研究者系の教員も「社畜」として飼ひ慣らされた「アンチ大学」、「大学の陰画（ネガ）」であり、学者たろうと努力しているほくたち少数の教員は加重の雑用を押しつけられ、迫害された。一九九〇年代末のことである。ほくも、のちに皇太子妃雅子さま（当時）が二〇〇四年に患った「適応障害」と同じ病いに倒れ、精神の危機と生命の危険も相俟って、「亡命」——若い世代にわかりやすく言うならば、「脱北」——を余儀なくされた。他人はほくを愚かだと嘲笑ったり、我慢が足りないのと罵ったが、それが普通の大学であれば——真の大学とは言わない——、好き好んで辞めたりはしなかったのである。研究・執筆だけでなく、教育にも情熱をもって取り組むという意味で、ほく以上に大学教員に向いている人間は、ほとんどいないと自負している。「愚者の楽園」としか言いようのない環境——教員だけが愚者であって、事務員も、学生も愚者ではなかった——にあれ以上身を置いていたならば、ほくは間違いなく自殺に追い込まれていたことだろう。

心底ひどい目に遭ったが、社会言語学の講義を初めて担当できたことは、ほくの視野を拡げてくれた。社会言語学とは、言語が社会の関数である、すなわち、社会のなかの階級関係や権力関係などが言語のなかに反映され、複数の言語変種間のヒエラルキーを生み出すという考え方をする領域である。この場合の〈社会〉とは、新聞が紙面を政治、経済、国際、社会、文化と分ける際の狭義の「社会」ではない。社会だけでなく、政治も、経済も、国際も、文化も、〈社会〉のなかに入ってくるのである。そこで、ほくは、自分のあまりの無知に気づかざるをえず、いままで勉強したことのないあらゆる分野——政治思想史、社会記号論、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル・スタディーズ、比較文明論、アイリッシュ・スタディーズ等々——を手当た

り次第に勉強しはじめた。時間がどんなにあつても足りないなかで、ブラックス部の執拗な迫害は心身を摩耗させた(当時は、「バワハラ」という言葉もなければ、「ブラック企業」という言葉も存在しなかった)。

社会言語学者たちはほとんど評価しないのだが、ぼくは、社会言語学者とは言わないが、社会言語学的思想家としてもっとも偉大であるのは、エスペラントを創り出したザメンホフだという確信にたどり着いた。国際共通語としてのエスペラントの使命は終わったとしても、ザメンホフのナシヨナリズム(民族主義)を超える理想主義的思想は、今日もつと学ばなければならない、と確信したのである。エスペラントからからザメンホフへ——ぼくのこのような立場は、エスペラントイストにはあまり評判がよくないし、ぼくのザメンホフ研究はあくまでも初歩的なものにすぎない。ぼくとしては、エスペラントイスト自身の手によってザメンホフ研究が進められ、深められることを期待しているのである。

## 本書の構成と内容

Iに収録した「世界は言葉のなかに——言語とその主体」は、一九九五年にぼくが栗本慎一郎自由大学で行なった講義をもとにしており、本書の「総論」に相当する。言いかえれば、それは、II、III、IV、Vの展開を高速度で先取りしている。「言語」とは何か、「言語学」と「言語哲学」の違いは何かという基礎の基礎から説き起こして、「言語とその主体」というテーマをめぐって、ソシュールからイエルクスレウへと一気に駆け上がってゆく。イエルクスレウの格理論は日本ではほとんど知られていないから、大学院を超えた高度な内容である。この講義は、読者にいわばジェット・コースターのな体験を強いるかもしれない。

II 丸山圭三郎からソシュールへ」に収録した最初の三篇は、かつて『愛の言語学』(夏目書房、一九九五年七月)に収録したものを再録した。その理由の一つは、『愛の言語学』の版元が倒産し、入手困難になつてゐることもあるが、それ以上に二つ目の理由として、ぼくにとって第一の〈原点〉が丸山圭三郎であつたこと、

しかしながら、第二の〈原点〉であるソシユールの読解をめぐることは、ほくが丸山圭三郎から遠く離れていったことを明らかにしたかったからである。

竹田青嗣、前田英樹との鼎談は、本書に収録することにはいささかの躊躇があったのだが、読み返してみると、書き言葉では言わないようなことを対話者を前に語っているところが多々あつて、語られた論考が書かれた論考を補っていることに気がつき、収録に対する躊躇は消え去つた。

「Ⅲ ソシユールからイエルクムスレウへ」は、文字どおり「Ⅱ 丸山圭三郎からソシユールへ」と「Ⅳ イェルクムスレウ、極北の言語学」の移行段階に相当する。ここでは、イエルクムスレウの言語理論のなかでも、とりあえず「ソシユールの唯一かつ真の後継者」と呼ばれる所以、すなわち、ソシユールの直観を整合的な理論に体系化し、形式化した言語学者としてのイエルクムスレウに照準を合わせている。

参考、言語学における構造主義においては、内在主義者、イエルクムスレウと対立する面もある機能主義者、ヤーコブソンにかんする短い論考も収録したが、それは、巨人ヤーコブソンのエピステモロジックな側面を切り取つたものにならず、今後もっと学んでゆきたいと考えている。

「Ⅳ イェルクムスレウ、極北の言語学」に収録した七篇の論考は、本書のなかでも著者をもっとも自信をもっているものである。巻末の「初出一覧」をご覧になればわかるように、最初の六篇は、月刊『言語』に「イエルクムスレウ」再入門」という総題のもとに連載したものであり、最後の論考は、同じ月刊『言語』の「デカルト派言語学を超えて——21世紀の言語研究のゆくえ」特集号に単発で掲載したものである。

著者の自負が単なる主観的な思い込みでないことは、世界でも最大規模の言語学辞典である『言語学大辞典』に取り上げられたことによつても証明することができるだろう。「コペンハーゲン学派」の項目を紐解くと、参考文献として「新しい視点を示すものには、次のものがある」というただし書きをつけて挙げられているのが、立川健二／山田広昭『現代言語論』とここに収録した『イエルクムスレウ』再入門』の二点であり、



この二点だけなのである（亀井孝／河野六郎／千野栄一編著『言語学大辞典 第6巻【術語編】』三省堂、一九九六年一月、五八〇頁）。執筆者は明示されていないが、長いあいだ日本で唯一のイエルムスレウの言語理論（グロセマティック）の専門家として知られていた林栄一であると断定しても、間違いないだろう。

なお、そこで取り上げられた『現代言語論——ソシユール フロイト ウイトゲンシュタイン』（新曜社、一九九〇年六月）は、本書で詳しく取り上げられなかったソシユールの共時態／通時態の概念をはじめ、イエルムスレウの論敵であったヴィゴ・ブレンダル、イエルムスレウの融即的対立関係論、イエルムスレウの影響を受けたロラン・バルト、ほくにとつては丸山圭三郎、ソシユール以前の〈原点〉ともいべきジュリア・クリステヴァなどについてもほく自身の読解を提示しているので、本書の姉妹書として併せて読まれることをお勧めする。なお、『現代言語論』は増刷のたびに小規模な修正を加えてきたので、刷り数の多いものを手許に置いていただきたい（ほくが把握している最新版は、第一五刷、二〇〇四年二月である）。

イエルムスレウにかんして、ほくは、もっと専門性の高い論文やフランス語で発表した論考も書いているが、それらは収録しなかった。

先に、イエルムスレウは「ソシユールの唯一かつ真の後継者」と呼ばれていると書いたが、イエルムスレウがソシユール言語学を体系化・形式化しただけだと考えるならば、それは間違いである。本文中で詳述するように、イエルムスレウは、ソシユールを起点としつつも、言語学的には〈一般文法〉ないし〈言語類型論〉によって、記号論的には〈全体言語学〉によってソシユールを大きく超えていったのである。このようなイエルムスレウ像は、日本ではほとんど知られていない。

なお、IVのタイトルを「イエルムスレウ、極北の言語学」としたのは、第一に、イエルムスレウが〈言語学の極北〉とも呼ぶべきラディカルな地平を孤高に疾走していったからであり、第二に、イエルムスレウ自身が北欧のデンマーク、とりわけ首都コペンハーゲンから発信していたからでもある。イエルムスレウの言語

学からは、同国の哲学者、キルケゴールと同様、〈北〉の思想とでも言うべき厳しさが伝わってくるのである（富岡幸一郎『北の思想——神教と日本人』書籍工房早山、二〇一四年二月を参照）。

IからIVが理論篇であり、三つの〈原点〉を踏み固めるものであったのに対して、「V 愛と差別の言語学に向けて」は、それらの理論の応用篇にあたり、多くの今後の探究に向けて〈原点〉を〈拠点〉へと変換することを目的としている。

何のための〈拠点〉かといえば、過去のほくは、もっぱら〈愛〉に関心を注いでいたが、現在のほくは、むしろ〈差別〉の問題に関心を傾けている。「愛と差異に生きるわたし——区別・差別・対立・差異をめぐって」を『愛の言語学』から再録したのは、ほくの現在の問題意識にとって不可欠な論考だからである。この論考において、アドラー心理学を援用しつつも、言語学的に区別／差別／対立／差異を定義しえたことは、今後のほくの仕事にとって確かな〈拠点〉となることだろう。その意味では、巻末の「愛の言語思想家、ザメンホフ——言語差別を超えて」がこの定義を最初に利用していたことに、著者もあらためて気づかされた。

コラムとして、「現代言語論の名句」を本書の各所に散りばめた。読者には、本文を補完する豆知識として、楽しんでいただけたらと思う。

もちろん、ほく自身も、この小さな一冊によって〈言語〉と〈言語学〉が——さらには、〈記号論〉が——復権し、かつての輝きを取り戻せるなどと考えているわけではない。他の人びとからも、同じような声が上がることを期待しつつ、一つの問題提起として世に送り出すのである。

I  
世界は言葉のなかに

## 世界は言葉のなかに——言語とその主体

「言語とその主体」というタイトルでお話ししたいと思います。

わたしたちは、言葉を話したり、聴いたり、書いたり、読んだりします。人間は言葉をしゃべる動物である、という言い方がよくされるように、言語こそ人間を人間たらしめているものだと言われていますね。

そこでまず、人間の言葉を研究対象とする言語学とはどのような学問か、という問いから入りたいと思います。

それぞれの学問の根底には、人間とはこういうものだという人間観があるはずで、政治学であれば政治的な人間、経済学であればホモ・エコノミクス——人間というのは経済活動を行なう存在であると考えられるだろうし、社会学であれば人間とは社会的な存在であると考えられるわけです。

わたしたちの言語学は、人間というのは言語的な存在である、言葉というものが、人間が人間である所以ゆえんだと考えるわけです。

そして言語学という学問は、とりあえず現実に存在している多種多様な言語——最新の研究成果では世界に1000近くあると言われていますが——を研究対象にして、音声や文法や意味などの分析、記述を通して、最終的に人類が普遍的にもっている言語がどうかを調べてゆきます。

もちろん、言語を話す、あるいは聴く人間について考えている学問は言語学のほかにいくつもあります。主として哲学とか、心理学、とくに精神分析学ですね。人間とはどのような存在であるかを考えるとき、言語とというのは一つの決定的な要素になるからです。

そこで、言語を操る主体としての人間とはどのようなものか——それはそのまま、言語とはどのようなものか、という問いにつながるのですが———について、フェルディナン・ド・ソシュールとルイ・イエルクスという二人の言語学者の理論を通して考えてみたいと思います。

## 言語学と言語哲学

わたしは「言語哲学者」だと紹介していただいたのですが、わたし自身はむしろ自分を「言語学者」であると思っています。そこでまず、言語学と言語哲学はどう違うのか、考えてみましょう。

言語学も言語哲学も、当然ながら言語を対象とする学問です。でも、そう言うときの「言語」とは何か、が問題なのです。

ソシュールは、言語を二つに分けて考えていました。

一つは、人間が言語をしゃべることができる、「言語能力」という意味での「言語」です。何語であろうと、あるいは幼児語であろうと、そこらへんの女の子たちがしゃべっている、大人が眉をひそめるような変な言葉であろうと（笑）、すべて言葉は言語です。そうした総称としての言語を、ソシュールは「ランガージュ」と呼んでいる。

もう一つは、個々の社会で話されている言葉ですね。日本語とかフランス語とかデンマーク語といった個々の言語体系。それを「ラング」と言います。これらの言語は、国ごとに違うのではなく、文化や民族ごとに違います。だから、言語学では「母国語」という言葉は使いません。あくまでも「母語」です。よく間違っって使われていますが。

このラングは、「自然言語」とも言われます。言語というものは、その発生はよくわかっていません。誰がいつ話し始めたかはわからないけれど、とにかく、いつしか人類は話し始め、現在にいたっている。言語は、人

為的に構築されたものではない。自然にできてきたものである。だから、自然言語と言います。

この自然言語と対立するものは、人工言語ですね。 에스ペラントに代表されるような国際コミュニケーション補助言語、あるいは数学やコンピュータ言語なども一つの人工言語です。

もう一つは、「パロール」と言つて、これは個々人のある特定の状況における発話のことです。日本語をしゃべる人、フランス語をしゃべる人はたくさんいますが、個々人がそうした言語（ラング）をどのように使っているのかは、人によつても状況によつてもさまざまです。そうした個々人の言語使用のことを「パロール」と言います。

言語学というのは、これら三つの言語のうち、とりあえずラングの学問だと言えらると思ひます。現実にさまざまに存在している多様なラングを研究対象にして、分析し記述する。それが言語学です。

現実に存在している言語といつても、たいへんな数です。もちろん数え方にもよるので、確定はできません。何を言語と見なし、何を方言と見なすかという基準が、科学的に確立されているわけではないからです。たとえば、中国語を一つの言語と数えるかどうか。みなさんは、どう思われますか。とりあえず最新の研究成果では、一〇〇〇〇近くの言語があるとされています。そのなかの一つが母語で、わたしたちにとっては日本語であると言つても間違いではないでしょう。

言語学は、この母語のなかで、言語とは何かを考えるのではなく、基本的には外国語というか「異言語」の立場から言語を観察します。理論をもとに仮説を立て、データの分析をし、検証してゆく。ですから、言語学は哲学ではなく経験科学です。そして最終的には、そうした研究の成果を通して、人類が普遍的にもつてランゲージとはどういうものか、考えてゆこうとするものです。

それでは逆に、言語哲学とはどのようなものか。言語哲学はフランス語では、philosophie du langageと言ひます。ラングではなくランゲージ。つまり、言語哲学はランゲージの本質的な解明をめざします。ラン

ガージュとはそもそも何であるかとか、ランガージュと人間とのかかわりとはどのようなものかといった、本質論です。言語と意識・無意識の関係、言語と思考との関係、それを説明しようとする。だから経験科学ではなく、哲学的考察になるわけです。

ですから、通常、言語哲学はラングの多様性には興味を示しません。世界にはさまざまな言語があつて、言語の多様性にもなつて文化も多様である、などということとは無関係です。諸言語の記述や分析は行なわれない。

言語哲学者は、自分が日本語で思考していれば日本語、ドイツ語で思考していればドイツ語で考えます。だから、認識論的に言えば、「異言語」の立場ではなく、「母語」の立場に立つ、と言えると思います。

具体的にどういうものを言語哲学というかと言えば、英米系の分析哲学ですね。ウイトゲンシュタイン、オースティン、サール。あるいはフレーゲ、カルナップといった人たちの研究は、言語哲学の系統です。

彼らがやっていることを一言で言えば、論理的な意味論です。音声学や音韻論（オノメトリック）はやりません。文の意味とか、語（単語）とその指し示す対象との関係などの研究をする。

ただ、わたしの恩師である丸山圭三郎先生は、言語学者であるソシユールの研究から入ったのですが、自分の仕事を「言語哲学」だとおっしゃっていました。それはおそらく、アングロ・サクソン系の分析哲学を研究している人たちから見ると、少し違うぞと思われるでしょう。しかし、丸山先生の後期の研究は、ラングというよりランガージュの解明という点に力点が置かれていましたから、そういう意味では、「言語哲学」と言っても間違いではないと、わたしは思います。

### 言語が違えば世界も違う

こうした言語学や言語哲学の周辺に、言語学と随伴して仕事をしてきた学問があります。それが、文化人類

学あるいは民族学です。そして、二〇世紀の言語学と文化人類学がもたらした重要な認識に、言語と文化の一体性ということがあります。すべての言語・文化は独自の構造をもっている。そしてそれらのあいだに優劣はなく対等である、と。

もちろん、二〇世紀以前から、いろいろな言語思想の流れがありました。一八世紀のフンボルトとか一九世紀のニーチェとか。そのなかにすでに、言語は、ある特定の世界観を運搬しているものなんだという考え方がありました。言語が違えば、世界の認識の仕方、世界の表象の仕方が違う。そういう考え方を、数多くのラングを分析することでさらに推し進め、周辺学問と連関して、言語と文化の一体性というはつきりとした認識をもたりました。それが二〇世紀の言語学だったわけです。

いろいろなレヴェルで、このことは説明できます。

たとえば、数の認識。ヨーロッパの言語では、単数と複数という文法的なカテゴリーがある。それを曖昧にして語ることはいけません。それに対して日本語では、単数か複数かという文法カテゴリーはありません。「日本語やフランス語という言語」と言うとき、「言語」という日本語に複数形はありませんが、フランス語ではその場合は「ラ・ラング」ではなく「レ・ラング」とかならず複数形にしなければなりません。

つまり、日本語ではものを認識するときに、それを単数か複数か意識する必要がないということですね。もちろんそれを区別することも可能ですが、その区別が強制的ではないわけです。

あるいは、フランス語やドイツ語には性というカテゴリーがある。ありとあらゆるもの、それこそ性を本来もたない無生物に対してさえ、男性か女性か、もしくは中性か、区別しなければなりません。でも日本語では、たとえばネコならネコとしか言いません。ほんとうに必要な場合だけ、メスネコとかオスネコとか、性別をつけ加えるわけです。日本語なら「土曜日、友だちの家に泊まりに行く」と言うだけですみますが、フランス語だったら、男の友だちか、女の友だちかを絶対に言わなければならない(笑)。



あるいは人称代名詞。たとえば英語なら二人称は「you」しかないけれど、フランス語では「tu」と「vous」の二つがある。これは相手との関係が近いか遠いか、親しいか親しくないかで使い分けます。これは、コミュニケーションにおいて大きな違いを生みます。どんなに親しくなっても英語では「you」ですが、フランス語では「vous」から入って「tu」に転換する瞬間がある。そこで二人の関係が一挙に接近する。これは、男女の関係ではけっこう重要な瞬間なんです。

ですから、言語によって認識の仕方でもコミュニケーションのあり方も違ってきます。だから言語学的な観点から言うと、言語と文化を一体のものと考える。言いかえれば、言語はある世界の表象の仕方、固有の世界観を運搬するものである、と考えるわけです。

### 人間は「意味という病<sup>やま</sup>い」を病<sup>や</sup>んでいる

言語というのは、世界のカテゴリー化の仕方である。言語によって世界は区分される。これはもつと極端な言い方をすれば、言語と無関係に世界は存在しないということです。結局、実体としての世界なんか無い、と。これはどういうことかという点、そもそも人間の外部に、客観的に世界や現実があらかじめ存在しているわけではない、ということ。人間はけっして、生<sup>なま</sup>のモノ、モノそのものに触れることはできない。ありとあらゆるものに、意味づけをして見ているわけです。

こうした考え方は、ソシユールやイエルムスレウといった言語学者たち以外の思想家にもある程度共有されていて、たとえばオーストリアの心理学者、アルフレート・アドラーなどは、やはり「人間は意味づけの世界に生きている」と言っています。彼はもともとフロイトと共同研究をしていて、彼の弟子のような存在だったのですが、あるときから精神分析を離れ、個人心理学ということを出した。その考え方が、非常にソシユールに近いんですね。

たとえば、木そのものなどはない。かならずそれは、人間と関係づけられた木である、と言う。われわれは、自然そのものなど認識できない。かならず人間と関係づけられた自然を見ている、と。

すべてを意味づけして見ている。これはもはや、言語学の範囲を超えて記号論——記号論は言語学を發展させた学問です——になってしまいましたが、要するに記号論では世界を「意味世界」と考えます。世界とはつねにすでに意味づけされている。

このことはいろいろなレヴェルで言うことができます。さっき言った、日本語やフランス語、デンマーク語といったラングのレヴェル、つまり文化のレヴェルでも見る事ができる。

たとえば、日本人は肩が凝るけれど、フランス人は肩が凝らない。なぜなら「肩が凝る」という表現がないからです（笑）。もちろん「肩が凝る」に似た状態がフランス人にまったくないなんてことはありえないのであって、フランス人に「どうなっているんだ」と聞くと、「背中が痛い」「首が痛い」と言うわけです。でもまず「肩」とは思っていない。「凝る」というのは日本語では固い、凝固するということのような感じだと思うのですが、フランス語にはそういう表現がないのであれこれ説明する。すると、なるほどと理解はしてもらえます。類推はできるけれど、やはり感じ方は違うのです。日本語とフランス語という言語の違いが、身体感覚にまで出てくるんですね。

もっと個人のレヴェルで考えてみると、一人ひとりの人間はある一定の意味世界を生きている。だから、何かを認識するとき、かならず認識のバイアスが介在する。簡単に言えば、同じ出来事が起こっても、人によって受け取る事実は違うということです。

たとえば無言電話があったとき、それをどう把握するかというのは、大袈裟に言うとも個人の世界観、意味づけの仕方によって違ってくる。自分がある人に恋をしていて、その人から電話がこないかなと思っていたりすると、きっとその人からだったんだ、しかし何かためらいがあって切ってしまったんだ、というふうに解釈し

## 立川健二（たつかわ・けんじ）

1958（昭和33）年、埼玉県浦和市（現、さいたま市）生まれ。1982年、東京外国語大学フランス語学科卒業。1989年、東京大学大学院人文科学研究科（仏語仏文学専攻）博士課程中退。その間、サンケイスカラシップ奨学生としてバリ第Ⅲ新ソルボンヌ大学に、フランス政府給費留学生としてバリ第Xナンテール大学大学院（言語科学専攻）博士課程に留学。大阪市立大学文学部助手、東北学院大学教養学部助教授、文教大学国際学部教授を経て、2000年から在野の探究者。本来の専攻は言語思想史、言語学、記号論。とくにそのイェルムスレウ研究は、世界的水準にある。著書に『《力》の思想家ソシュール』（水声社）、『現代言語論』（共著、新曜社）、『誘惑論』（新曜社）、『愛の言語学』（夏目書房）、『ポストナショナリズムの精神』（現代書館）など。訳書に、ショシャナ・フェルマン『語る身体のスキャンダル』（勁草書房）、フランソワーズ・ガデア『ソシュール言語学入門』（新曜社）がある。Email address: ktatsukawa@ymobile.ne.jp

## 言語の復権のために ソシュール、イェルムスレウ、ザメンホフ

---

2020年1月30日 初版第1刷印刷

2020年2月10日 初版第1刷発行

著者 立川健二

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1691-3 © Kenji Tatsukawa 2020, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。